エゼキエル書
注解

枯れた骨

フレデリック・A・タトフォード著
中川 大 訳

牧草社

死んだ骨が生き返る

エゼキエル書注解

著者紹介

フレデリック・A・タトフォード博士は預言をテーマにした本を数多く執筆し、集会での語り手として多くの国々でその名が知られている。国際預言の証人運動の会会長、進化論抗議運動の会副会長、クリスチャン市民奉仕連合の副会長等を務め、いくつかの宗教的、非宗教的団体の協議会のメンバーでもある。仕事ではイギリス原子力エネルギー局局長、歳出研究所所長、政府購買国立研究所（米国）所長等。

献呈の辞

グレースに。愛する妻であり、彼女の根気と忍耐はその夫に余りあるものだった。

「また会う日まで」。

タトフォードの他の著作

小預言書シリーズ

（『ヨナ書・ミカ書・ナホム書・ハバクク書』が日本語訳既刊）

目次

序文 …… 7
一．はじめに …… 9
二．ケバル川での幻 …… 18
三．エゼキエルの任務 …… 34
四．見張り人 …… 44
五．教訓となる実例 …… 59
六．エルサレムの運命 …… 72
七．偶像礼拝の罰 …… 85
八．終局の災い …… 94
九．神殿の冒瀆 …… 114
十．六人の武器を手にした男 …… 128
十一．大火災 …… 138
十二．エルサレムの住民と捕囚の民 …… 146
十三．町からの逃亡 …… 165
十四．預言者たちと女預言者たち …… 179
十五．不信仰な長老たち …… 194

十六．役に立たないぶどうの木……208
十七．不貞の妻……213
十八．杉の木と二羽の大鷲……244
十九．個人的責任……257
二十．弔いの哀歌……272
二一．罪深い民……280
二二．復讐の御手……301
二三．流血の罪の町……320
二四．オホラとオホリバ……338
二五．エルサレムの最後……359
二六．異教徒の敵……371
二七．フェニキヤ第一の町……382
二八．立派な船……402
二九．ツロの支配者たち……420
三十．油注がれたケルブ……435
三一．シドンの滅亡……439
三二．エジプトの運命……448
三三．南の荒廃……460

三四．おごり高ぶったパロの滅亡……479
三五．海の中の巨獣……490
三六．警告と悔い改め……507
三七．イスラエルの牧者たち……524
三八．エドムの運命……538
三九．主の擁護……544
四十．復活と再統一……562
四一．ゴグの侵入……574
四二．清められた国……590
四三．千年王国の神殿……604
四四．神殿の建物……622
四五．聖なる部屋……634
四六．主の御住まい……644
四七．祭司のための定め……659
四八．奉納物……672
四九．君主の義務……686
五十．川……695
五一．イスラエルの国の割り当て……708

序文

完全に自由に行動できる人はこの世には存在せず、私たちの人生は部分的にではあるにしろ、私たちが完全に知ることのできない力で決定付けられてしまうことよくあります。確かに私たちは、人生におけるごくありふれた出来事でも、それが持つ影響力や意味にほとんど気が付かないでいます。

何気ない友との会話の中で、ある本を作ることにある程度同意したばかりに、自分が何をしなければならなくなるかなど考えてもいませんでした。会話を聞いていた善意の同僚の、私の許可を得ない公的発言により、私は思いがけず大きな二つの仕事を任されることになり、困ったことになったと思ったものです。一つは十二の小預言書の解説で、一九七五年に十二巻目を出版するまでほぼ四年を要しました。もう一つはエゼキエル書の解説です。この書の長さとその解釈上の問題に加え、私自身があまり乗り気でなかったため、こちらのほうがある意味ではより困難な仕事だったと思います。

エゼキエル書を学べば学ぶ程、彼の書き残したものは魅力を増し、その理解が進むにつれ、それは逃れることのできない私たちへの問いかけとなりました。もちろんこのブジの子は、イスラエルの歴史上最も暗かった時期の一つに於いて、その民の悲しく不名誉な最後を預言した人です。しかし彼は、イスラエルの民の究極的な回復も預言しました。イスラエルの民は再び一つの国となり、主の御栄光は、彼らが経験したことのない方法で彼らのうちにとどまるのです。

エゼキエルは彼の時代以降のどの解説者よりも、その預言をより明晰かつ論理的にするためには、ど

のような順序と構成で書けばよいか、多くの時間を費やして努力したことでしょう。同時に彼はその預言の日付を書き記し、歴史的な文脈と意味を明らかにしています。象徴やたとえを駆使して預言を提示し、彼は聞く人の注意を引きました。その上彼が自分の書いたものに一度ならず手直しをし、文を磨き上げていったことは明らかです。しかしながらエゼキエル書は彼によるものであり、様々な解説者によるその続編や付属書の言及は、認められるべきではありません。

この解説書は学者向きのものではなく、一般読者のためのものです。従って本文には、一部の注解者たちにより提起されたような性格の問題は含まれていません。この本を執筆することにより、この本を読まれる方よりも大きな祝福を受けたかもしれません。しかし読者にとって益となり、聖書中最も重要な書の一つを理解する助けになるものと信じています。

聖書の引用で用いたものは標準的な訳とは違いますが、参照可能なすべての原典に基づいており、正確に原文の意味を伝えるよう試みています。

本書の題名は、もちろんエゼキエル書三七章二節からとられたもので、その章が示す通り、イスラエルの「干からびた骨」は、いつの日か国としてまた霊的に生き返ることでしょう。

フレデリック・A・タトフォード

第一章　はじめに

歴史的背景

十部族のイスラエル王国の背教は、紀元前七二一年のアッシリヤ捕囚で頂点に達しました。それは誇り高ぶったアッシリヤ帝国がその絶頂にあった時代でもありましたが、アッシリヤの世界支配は、メディアとバビロンの連合軍による攻撃で、その百年後に終わりを告げます。しかし彼らの支配もまた長くは続かず、紀元前六百九年エジプトのパロ・ネコにより北部を席巻され、ユーフラテスに至られ、ユーフラテス川の主要な浅瀬の一つを支配していたカルケミシュを占領されます。ユダの王ヨシヤは愚かにも不必要な介入をし、エジプトの進撃を阻止しようとしますが、殺され彼の軍隊も滅ぼされてしまいます（Ⅱ歴三五・二十～二四）。

バビロンのエジプトへの反撃はすぐにはありませんでしたが、紀元前六百五年ネブカデネザルはパロの軍に軍隊を差し向け、パロの軍勢を根絶やしにし、その逃れた者もハマスで滅ぼします。ネブカデネザルはユダにも進軍し、神殿の宝物を奪い、数多くの若い高官をとりこにし、ユダに貢ぎを課します。このような経験にもかかわらず、臣下であるエホヤキムは後にバビロンに反逆しますが、幸運にも彼自身はその報復を受けることなく死にます。しかし彼の子のエホヤキンは、ユダの多くの高官や職人などと共にバビロンに捕え移され、エホヤキムの反逆の代償を支払うことになるのです（Ⅱ列二四・十～十

一）。そしてネブカデネザルは、エホヤキンのおじマタヌヤをゼデキヤという名に改めさせ、傀儡の王とします（Ⅱ列二四・十九）。しかしこのゼデキヤは頼りない弱い男で、彼を立てたネブカデネザルの恩義に報いようとはしません。

ゼデキヤはまもなく試みにあい、愚かにも反逆しようとします。その結果バビロンはこの小さな国に猛攻撃をかけます。紀元前五八七年にエルサレムは略奪され、破壊され、ユダに残っていた民の大部分は捕囚として連れて行かれます。王家の人々は殺され、ゼデキヤ自身はバビロンに捕え移される前に目をつぶされます。

エゼキエルは、最初の捕囚で捕え移された民の一人で、紀元前五九五年から紀元前五二七年まで二二年以上にわたり、このような歴史的背景の中で預言をしたのです。彼の預言は捕囚の民のためであり、またユダの地に残っていた人々のためでもありましたが、おそらく実際にはユダの地の人々には届かなかったことでしょう。

聖都の破壊前ですらユダヤ民族の誇りは地に落ちていましたが、エルサレムの陥落により、捕囚の民は絶望し落胆しました。民族の未来はもうないのではないか、という疑問が彼らに生じました。新たな捕囚の集団が到着し、その数が増えるにつれ、不審はつのっていきました。

しかしバビロンでの生活はつらいものではありませんでした。捕囚の民が迫害を受けたり、特別な困難を受けたりした証拠はありません。彼らは同化のため散り散りにされたり、バビロンの住民の間に住まわされたりせず、ユダヤ民族だけで住む土地が与えられていました。彼らは普通の生活を送り、その習慣を守り、政治形態を維持し、長老の裁きの下で生活することを許されていました（八・一）。神殿